

令和 5 年 5 月 11 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00995

研究課題名（和文）金国の礼制と都城の研究

研究課題名（英文）Research on State Ritual and Capital Cities under the Jin Dynasty

研究代表者

古松 崇志（Furumatsu, Takashi）

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：90314278

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：12世紀前半に東北アジアで勃興した女真人が建国した金国は、契丹・北宋をあいっいで滅ぼして中国本土北部まで版図におさめ、13世紀初頭のモンゴル帝国の出現までユーラシア東方で覇を唱えた。本研究は、金国の儀礼制度を対象とし、とくにその根幹をなす祭天儀礼、祖先祭祀儀礼をとりあげ、各種儀礼の沿革や儀式次第を、前後の時代を含む他王朝の儀礼と比較しながら詳細に検討し、漢化が進展する過程とみなされがちだった金国の支配体制や王権の特質を再考すべきであることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

12世紀にユーラシア東方で覇を唱えた金国の歴史は、ユーラシア東方史上重要な位置を占めるにもかかわらず、史料の僅少もあって従来は研究が立ち遅れている。本研究は、金国の歴史のなかでは文献史料が比較的豊富な儀礼制度に着目し、もっとも肝要な儀礼である祭天儀礼や祖先祭祀を取り上げて、その儀礼の内容を典籍文献の徹底した読み込みをつうじて実証的に明らかにするとともに、女真の伝統に根ざすものや契丹から影響を受けたものなど北方の狩猟遊牧民の文化に由来する儀礼祭祀と中原王朝から導入した儒教儀礼とが重層する様相を初めて本格的に解明した。

研究成果の概要（英文）：In the early twelfth century the Jurchen people who rose into power in Manchuria established the Jin dynasty and overcame Khitan and the Northern Song. Consequently, the Jin became the dominant power in Eastern Eurasia for about eighty years until the Mongol unification of Eurasia. This study deals with state ritual of the Jin dynasty, especially sacrifice to Heaven and Veneration of the dead, and presents a detailed examination of the rites by comparing with those of other dynasties. It also sheds light on the characteristic of the imperial institutions and legitimating ideologies.

研究分野：東洋史

キーワード：金国 儀礼 祭天儀礼 祖先祭祀 シャーマニズム 宗廟 郊祀 御容

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

12世紀前半に東北アジアで女真人が勃興して立てた金国(金朝)は、騎馬軍事力を武器に中国北部を支配下におさめ、13世紀初頭に至るまでおよそ80年間にわたり繁栄した。金国はモンゴル帝国出現まで300年ほど続いたユーラシア東方の多極化の最終局面における覇者であり、契丹(遼)・北宋両国の後を受けて次のモンゴル帝国によるユーラシア統合へとつなぐ存在だったのみならず、高句麗・渤海よりつづく東北アジアのツングース系王朝の系譜のなかでは従来にない水準で版図拡大を遂げ、のちのマンジュ(清朝)の台頭を導く遠因となったといえ、歴史上重要な位置を占めている。にもかかわらず、これまでその歴史研究は、文献史料の不足もあり、おおむね低調であった。少ないながらも金史研究の潮流を振り返ると、まず戦前の日本で、満鮮史・満蒙史研究の隆盛のもと、政治・制度など主に王朝の支配のありようについての基礎的な史実が明らかにされた。戦後になると、台湾・香港・中国大陆などの研究者によって、女真の支配者集団が中国本土を支配するなかで徐々に漢化していった歴史的な過程が描き出され、ほぼ定説として受け入れられている。これまでの金国の漢化についての理解は、素朴あるいは野蛮な北方民族が高度な中華文明に同化されていくという中華史観の図式を踏襲している傾向があり、再検討の余地を残している。しかしながら、ここ10年ほど、中国や日本で金史研究の活性化の兆しが見られるものの、金国の支配体制や王権の特質についての再検討は依然として十分行われていない。

そのいっぽうで、北朝・隋・唐、契丹(遼)、モンゴル(元)、清など、北方に出自を持つ狩猟・遊牧民を中核にして中国を支配することになった諸王朝の歴史については、草原世界を中心にすえる中央ユーラシア史を視野に収めた研究手法が広がりつつあり、近年多くの成果が積み重ねられている。研究代表者もまた、これまでに金国に先行する契丹(遼)の歴史研究に取り組み、現地調査の知見や新出の考古資料を活用して儀礼や宗教(仏教)を具体的に分析し、契丹王権の特質が、騎馬軍事力による覇権を背景にした北方遊牧民の武威への矜持を一貫して根幹に持ちながら、中国本土をはじめとする外来の制度や文化をも積極的に取り込んだ多元的な性格を持つものだったことを明らかにした。こうした研究をふまえ、契丹に後続する金国の歴史についても、中国史のみならず中央ユーラシア史の文脈をも視野に収めてとらえ直すことが必要である。そして、契丹の東北辺境での建国、契丹・北宋を滅ぼしたことによる版図の拡大、中都(現・北京市)への遷都と中国本土への拠点の移動、④モンゴル侵攻による汴京(現・河南省開封市)への遷都、といった歴史展開とともに、金国の王権がどのように変容していったのか、あらためて具体的に問い直さねばならない。

## 2. 研究の目的

本研究では、金国の王権や支配体制の特質を実証的に明らかにすべく、礼制について取り上げる。なかでも、王朝儀礼の根幹をなす祭天儀礼(拜天、郊祀)と祖先祭祀儀礼(太廟、原廟、山陵、仏教寺院での祭祀)について重点的に検討する。それぞれの儀礼について、礼制関連の典籍文献にもとづいて儀礼の沿革や儀式次第を詳細に分析するとともに、儀礼が行われる場である都城(最初の都上京と遷都後の都中都)の空間を考察すべく、近年調査・研究が進展している上京(現・黒龍江省ハルピン市阿城区)と中都に関する最新の考古学の成果を参照する。本研究は、都城空間の中で儀礼を考察することで、礼制研究の成果を依然として不明な点の多い金代の都城研究へと還元しようとするねらいをもあわせ持つ。

第一に、金代礼制に関する体系的な研究として、研究史上の空白を埋める意義を持つ点である。零細な金代典籍のなかでは、礼制に関する文献史料は例外的に比較的豊富に残されているにもかかわらず、その研究はこれまで政治・官制などに比してきわめて手薄であった。そのため、中国史の他の時代の歴史研究では常識に属する礼制と都城を関連づける研究手法も金代についてはこれまで本格的には用いられていない。

第二に、それぞれの儀礼の詳細な検討をつうじ、金代礼制のなかから、女真の伝統にもとづく要素、契丹から伝わった北方王朝に由来する要素、中原王朝の制度に由来する要素を見だし、金国がもともと持つ中央ユーラシアの遊牧王朝の系譜に連なる性格と中原王朝の制度を選択的に導入することをつうじてそれが変容していく過程を、礼制に即して具体的に明らかにしていくことである。すなわち、中原を支配して以後、金国の漢化が進展していったという単線的な理解に陥りがちだった従来の研究の示す図式を、実証的に再検討することを目指す。

第三に、それぞれの儀礼の諸要素を、時代を貫いて前後の王朝と比較検討することである。たとえば、中原王朝の制度に由来する郊祀や太廟での祭祀がそれ以前のいかなる時代の礼制に範をとっているのか、以前の王朝とは異なる金の制度の独自性は何か、のちの元・明・清各王朝へどのような影響を及ぼしたのかについて考察する。要するに、礼制研究の視角にもとづいて、ユーラシア東方史あるいは中国史の長いスパンの中で金国という王朝の歴史的意義を再考することを目指すものである。

## 3. 研究の方法

本研究では、金代の礼制のうち、おもに祭天儀礼と祖先祭祀儀礼を中心にとりあげ、『金史』

礼志や『大金集礼』といった礼制を記した典籍文献にかんする近年の文献学研究成果を参照しつつ、その内容を精査・分析し、儀礼の沿革や儀式次第について詳細にあとづける。その際に、都城研究の成果をも参照し、儀礼が行われる場とその意味を考察する。近年、初期の都城たる上京城遺址では黒龍江省文物考古研究所による発掘調査が進められており、上京の都城研究は面目を一新しつつある。中都についても21世紀に入ってからの新知見をふまえた研究が現れてきている。したがって、都城研究においてはこれら考古学上の新動向の把握と活用が必須となっており、本研究では現地調査をおこなって、遺跡と出土文物の把握とその歴史的意義の理解に努める。そのうえで、本研究での儀礼研究の成果をあらためて都城の空間のなかでとらえ直し、これまで礼制についての検討が十分に行われてこなかった上京・中都の都城研究に貢献することを目指す。

また、前後の時代を含む他王朝（唐・宋・契丹・モンゴル（元）など）における礼制を記した典籍文献を読み込み、それらに関する研究文献も参照しながら、本研究の主題である金国の礼制とあわせて比較分析をおこなう。たとえば、祖先祭祀のうち、儒教に由来する太廟については、金国では上京での最初の太廟建設時から建国前の始祖以下十人の君主を皇帝に追尊し、世宗の時代には九代十二人もの先代皇帝を祀るに至ったが、他の時代の祭祀と比較することによって、その独自性を探る。また、儒教の礼制には存在せず、唐代後期に仏教の影響によりはじまった御容祭祀は、金代に初めて原廟として制度化されたが、前の契丹・北宋から受けた影響や後の元・明・清におよぼした影響など、前後の時代とのつながりのなかでその意味を考察する。上寿儀については、契丹・北宋のそれと比較して儀礼の特徴を明らかにし、のちのモンゴルへの影響についても検討する。こうした比較史の手法を用いることで、金国の礼制の歴史的意義を多角的に明らかにする。

#### 4. 研究成果

(1) 金国の祭天儀礼の研究については、次のような成果が得られた。

金国における祭天儀礼としては、女真の伝統にもとづく拜天と中原王朝の儒教式の儀礼である郊祀の二種があった。

建国当初は拜天のみが唯一の祭天儀礼で、その内容は中央ユーラシアの狩猟遊牧民のあいだで広範に共通してみられるシャマニズムにもとづく祭天儀礼の特徴を備えるものだった。金国では拜天は建国期より毎年重五（5月5日）に行われ、第三代皇帝熙宗合刺の時代から重九（9月9日）が、第六代皇帝章宗麻達葛の時代から中元（7月15日）が加わって年三回となり、王朝が滅亡するまで一貫して年中行事として連綿と挙行され続けた。拜天が年中行事だった点は、前後の時代の契丹やモンゴルといった北方王朝の天の祭りに決まった期日なかったのとは異なる。また、拜天は皇帝主催のもののみならず、各地に駐屯する猛安・謀克に所属する女真軍人のあいだでも行われ、それを背景に、章宗時代からは金国支配下の中原の地方政府（府・州）でも公式行事となった。地方政府での拜天挙行はモンゴルの支配下に入ったあとの世祖クビライの時代まで存続したのにくわえ、拜天に附随して行われる射柳（＝流鏑馬）や撃毬（＝ポロ）といった騎馬競技が元・明代の中原や北辺で流行しており、金国の中原支配が後世の風習に影響を及ぼした顕著な事例として注目される。

一方、中原王朝から導入した南郊郊祀については、熙宗や第四代皇帝海陵王迪古乃の時代から導入の計画があったが、郊祀のさいに祖先神を天にあわせまつる配侑に海陵王が難色を示したこともあって結局実現せず、第五代皇帝世宗烏祿の治世の大定11年（1171）の冬至に、ようやく初めて皇帝親祭による南郊郊祀が行われた。先行する中原王朝、とりわけ唐・宋の制度を礼官に入念に検討させたうえで郊祀が挙行されたが、都城の南郊に設けられた天を祭る場である圜丘は四成（四層）で、祭祀方式は天神のみならず地祇を合わせ祭る天地合祭であり、北宋で新法政権が主導した神宗・徽宗時代におこなわれた郊祀制度改革（祭祀方式は天地分祭、圜丘壇制は三成（三層））以前の北宋前期の制度にならうものだった。おそらく意図的に新法政権による改制を忌避したと考えられるが、この点は金国における宋制導入の特徴を示唆するもので重要である。しかし、皇帝親祭による南郊郊祀の挙行は、結局のところ金一代をつうじてわずか三回にとどまり、通常は官僚を派遣して祭る有司摂事で済ませ、宋制の「三年一郊」のような定期的に皇帝が親祭を行う制度は導入されなかったうえに、唐・宋で行われた正月上辛の祈穀祀、孟夏の雩祀、季秋の明堂祀、孟冬の神州地祇といったその他の天地祭祀は採用されず、郊祀の受容は部分的な水準にとどまったと言わざるを得ない。こうして見ると、金に仕えた漢人知識人たちの思惑は別として、金国中枢の支配者層にとって、祭天儀礼の主柱はやはり女真の伝統を受け継ぐ拜天だったと考えるべきだろう。

(2) 金国における祖先祭祀儀礼の研究については、以下のような成果が得られた。

金国の祖先祭祀には、御容（肖像）を用いる原廟（建国当初の太祖廟）での祭祀と先代皇帝の神主（位牌）を収めた太廟での祭祀の二種類があった。

金国の初期には、開国の祖である阿骨打（太祖）が亡くなったあと、遺体を埋葬した陵墓とは別に、本拠地の御寨（のちの上京）に御容を安置した太祖廟が建設されて祖先祭祀が行われた。供物を焼く焼飯と呼ばれる祭祀方式など、前代の契丹の影響が顕著だった。その後、熙宗時代には都城として上京があらたに建設され、城内の慶元宮に太祖阿骨打の御容が奉じられ、太廟の建設がすでに決まっていたことから、これが原廟と呼ばれるようになる。海陵王が中都に遷都すると、原廟として衍慶宮が創建され、太祖阿骨打を中心に、皇帝として追尊された建国以前の按出

虎水完顔部の祖先や生前皇帝に即位していない皇帝の父親をふくむ祖宗の御容が祀られた。ただし、皇后（女性）は原廟には祀られず、その御容祭祀は国都の仏教寺院で行われ、原廟を補う役割を果たしていたことが知られる。

一方、中原王朝にならって導入された太廟は、熙宗時代の初期に基本設計が制定された。祭祀の対象は、太祖阿骨打・太宗呉乞買の二人の先代皇帝のほか、熙宗の父纒果（徽宗）と建国以前の始祖函普以下の十人の祖先にまでおよび、七世十一室もの廟室を有した。生前に未即位の皇帝の父と数多くの建国前の祖宗とが祀られるという金代の太廟に特有の制度が早くも創建段階で確立したのである。このうち始祖函普・景祖烏古迺・世祖劬里鉢・太祖阿骨打・太宗呉乞買の五人の祖宗を永遠に太廟から神主を遷さないことにした。始祖以下が祀られることや建国前の祖先が三人も永遠に遷さない神主に指定されたことについては、開国伝説に現れる始祖三兄弟の子孫が宗室とされて金国中枢の女真集団の連合体を構成するという政権の成り立ちの特殊性を反映したもので、表向きは中原王朝の制度を忠実に導入したようでありながら、その内実は独自性の強いものだった。太廟での祭祀は、海陵時代に年五回の時享と三年に一度の皇帝親祭による大祭の禘祭とが定められ、次の世宗時代には大祭に五年に一度おこなわれる禘祭が加わった。また、世宗時代には前代の海陵政権を徹底否定しようとする政治的な目的から、海陵に殺害されて皇帝の称号を剥奪された三代皇帝合剌の名誉回復がおこなわれ、廟号閔宗の奉上、別廟での祭祀、太廟への附廟、あらたな廟号熙宗の奉上という一連の措置がとられ、それと連動するかたちで前皇帝迪古乃の諡号については、当初の「海陵郡王」号を剥奪して、最終的には「海陵庶人」に降格される。そのほか、太廟での祖先祭祀の変遷は、王朝の歴代皇帝の歴史をまとめた実録の編纂とも密接に連動している点もまた重要である。

以上（1）（2）の研究をつうじ、金国の儀礼祭祀について、以下のような特質が明らかになった。すなわち、女真の伝統にもとづく拜天や契丹の影響を受けた御容祭祀などを建国当初から一貫して維持しつつ、それに重層するかたちで、郊祀や太廟といった中原王朝の儒教儀礼が導入された。後者については中国の経書・礼書を入念に参照・研究した本格的な導入だったが、たんなる模倣だったわけではなく、金国の支配体制にあわせた選択的な受容であり、かつ独自の運用がおこなわれたのである。

以上の内容は、すでに口頭発表を行っており、学会誌および近刊の著書のなかで発表する予定である。

（3）金代の儀礼研究の淵源をさぐるべく、前代の契丹（遼）における即位儀礼（柴冊儀）、祭天儀礼（祭山儀）、皇帝の喪葬儀礼といった王権儀礼をとりあげ、契丹の支配者層が11世紀に至るまでシャマニズムを基盤とする基層信仰を維持する一方で、外来の仏教信仰を重層的に受容したというその信仰の特質を明らかにするとともに、契丹王権の正統性を支えた理念を考察した。この研究については、二度にわたりシンポジウムにて発表をおこない、論文を学術誌に公開した。

（4）本研究課題に関連して、金国・女真の包括的な歴史についての論集『金国・女真の歴史とユーラシア東方』を企画・編集し、金国の歴史を概説する論考を発表した。この論集は近年の日本における遼金史研究の盛行を反映した、研究の最前線を示すものとなった。同じく金国の歴史に関連する研究として、12世紀前半における宋（北宋・南宋）・金両王朝間の戦争や外交などの関係史について詳述する南宋の史書『三朝北盟会編』の文献研究を進め、2021年におこなわれた講演会をもとに共著として『金（女真）と宋：12世紀ユーラシア東方の民族・軍事・外交』を出版した。また、研究課題にかかわるより広範囲を対象とする研究成果としては、岩波新書のシリーズ中国の歴史の1冊として、北魏からモンゴル時代に至るまでのユーラシア東方の歴史を概観する通史として『草原の制覇』を出版したほか、10～12世紀のユーラシア東方における複数王朝が並存する「多国体制」について、これまでの研究代表者の研究成果をふまえて再検討する論考を学術誌上に発表し、「帝国」を切り口に11世紀ユーラシアの比較史の論点に供すべく、契丹・北宋という異なるタイプの南北「帝国」が並存するユーラシア東方史の時代状況を概観する論考を学術誌上に発表するなど、研究課題にかかわる金国の歴史を含め、現段階の研究水準にもとづいて中央ユーラシア東部と中国（あるいは東アジア）にまたがるユーラシア東方史のおおきな流れを示した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 古松崇志	4. 巻 17
2. 論文標題 契丹（遼）の王権儀礼と信仰	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 メトロポリタン史学	6. 最初と最後の頁 41-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古松崇志	4. 巻 68
2. 論文標題 徐夢しん『三朝北盟会編』と文献会読	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文	6. 最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古松崇志	4. 巻 23
2. 論文標題 10～12世紀ユーラシア東方における「多国体制」再考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 唐代史研究	6. 最初と最後の頁 14-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古松崇志	4. 巻 49
2. 論文標題 11世紀ユーラシア東方における多国体制と「帝国」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西洋史研究	6. 最初と最後の頁 137-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牛根靖裕・古松崇志・松川節・小野浩・齊藤茂雄・高井龍・伴真一朗・毛利英介	4. 巻 51
2. 論文標題 コスロフ蒐集ハラホト出土モンゴル語印刷文献断簡G110rについて 『大元通制』ウイグル字モンゴル語訳の発見	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本モンゴル学会紀要	6. 最初と最後の頁 41-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古松崇志	4. 巻 233
2. 論文標題 金国(女真)の興亡とユーラシア東方情勢	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 14-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古松崇志	4. 巻 95
2. 論文標題 金国の正旦・聖節の儀礼と外国使節	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東方学報 京都	6. 最初と最後の頁 173-201
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/250677	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古松崇志	4. 巻 66
2. 論文標題 李公麟「五馬図」との出会い	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文(所報)	6. 最初と最後の頁 39-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古松崇志	4. 巻 6
2. 論文標題 元代《遼史》、《金史》、《宋史》三史的編纂過程－一端《辯遼宋金正統》為中心	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歐亞譯叢	6. 最初と最後の頁 265-340
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 古松崇志
2. 発表標題 天と祖先をまつる 契丹(遼)・金の儀礼祭祀と王権
3. 学会等名 人文研アカデミー2022オンライン連続セミナー「草原と中華のあいだ 北方王朝(遼・金・元)の興起とユーラシア東方」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 古松崇志
2. 発表標題 契丹(遼)における都市と定住民
3. 学会等名 シルクロード学研究会2023冬「遊牧民と定住民の接点をさぐる」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 古松崇志
2. 発表標題 天と祖先をまつる 契丹(遼)・金の儀礼祭祀と王権
3. 学会等名 人文研アカデミー2022オンライン連続セミナー「草原と中華のあいだ 北方王朝(遼・金・元)の興起とユーラシア東方」(京都大学人文科学研究所)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 古松崇志
2. 発表標題 契丹（遼）における都市と定住民
3. 学会等名 シルクロード学研究会2023冬「遊牧民と定住民の接点をさぐる」（帝京大学文化財研究所）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 古松崇志
2. 発表標題 ユーラシア史のなかの中国史
3. 学会等名 大阪大学歴史教育研究会第136回例会 特集「岩波新書「シリーズ中国の歴史」から考える
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古松崇志
2. 発表標題 契丹（遼）の王権儀礼と信仰
3. 学会等名 メトロポリタン史学会第17回大会シンポジウム「前近代世界における宗教運動と文化交流の諸相」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古松崇志
2. 発表標題 契丹（遼）の王権と信仰 ユーラシア東方遊牧王朝の基層信仰と仏教
3. 学会等名 京都大学大学院文学研究科・文学部公開シンポジウム「ユーラシアにおける宗教遺産研究の可能性 伝播と融合」
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 古松崇志
2. 発表標題 岩波新書シリーズ中国の歴史 『草原の制覇』をめぐって
3. 学会等名 東洋史学研究会・九州歴史科学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古松崇志
2. 発表標題 鳥居龍蔵の遼文化研究 契丹（遼）史研究の新展開をめぐって
3. 学会等名 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館企画展「鳥居龍蔵と草原の遊牧王朝 遼」記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 古松崇志
2. 発表標題 金国の礼制文献 『大金集礼』と『金史』礼志
3. 学会等名 第39回東アジア后位比較史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古松崇志
2. 発表標題 金国の祭天儀礼と祖先祭祀
3. 学会等名 東洋史研究会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古松崇志
2. 発表標題 『三朝北盟会編』を読む 亡国の史書
3. 学会等名 第16回TOKYO漢籍セミナー「金（女真）と宋 12世紀ユーラシア東方の民族・軍事・外交」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古松崇志
2. 発表標題 10～12世紀ユーラシア東方における「多国体制」再考
3. 学会等名 唐代史研究会夏期シンポジウム「東部ユーラシア論を考える」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古松崇志
2. 発表標題 11世紀ユーラシア東方における多国体制と「帝国」
3. 学会等名 西洋史研究会大会シンポジウム「中世の帝国：ネットワークの諸相」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古松崇志
2. 発表標題 金國正旦、聖節禮儀制度的形成和外國使節
3. 学会等名 “10至13世紀不同政權間信息流通及其政治功能” 工作坊（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 古松崇志
2. 発表標題 10世紀契丹考古学の新発見：聖宗貴妃墓（蕭氏貴妃墓）と乾陵・顯陵
3. 学会等名 十世紀アジア世界の精華：遼代の宮廷文化と平安文化を探る（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 古松崇志, 伊藤一馬, 井黒忍	4. 発行年 2021年
2. 出版社 研文出版	5. 総ページ数 169
3. 書名 金(女真)と宋：12世紀ユーラシア東方の民族・軍事・外交	

1. 著者名 古松崇志, 白杵勲, 藤原崇人, 武田和哉（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 336
3. 書名 金・女真の歴史とユーラシア東方（アジア遊学233）	

1. 著者名 古松崇志	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 254
3. 書名 シリーズ中国の歴史 草原の制覇：大モンゴルまで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------